

才女の喪服

戸板康二



中央公論社

才女の喪服

著 者 戸板康二

昭和36年6月5日初版印刷

昭和36年6月10日初版発行

発行者 栗本和夫

印 刷 凸版印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2ノ1

電話 (561) 5921~9番

振替・東京34番

定価 290 円

©検印廃止

才女の喪服

目次

求	赤	自	妹	鳩	鉛	俱	坂
	い			の		楽	の
	ポ	由					
	ス						
婚	ト	詩		名	筆	部	家

二七	一〇三	九	三	六	四	六	七
----	-----	---	---	---	---	---	---

妻	か	電	搜	回	実	三つの手紙
の	ず					
席	子	話	査	想	験	

一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九
----	----	----	----	----	----	----

装
幀

阿
部
合
成

才女の喪服

坂の家

その住宅地には、谷があったり、丘があったりした。東京も南の郊外である桐ヶ丘^{きりおか}を中心とするこの一帯が開けたのは、三十数年前の、大震災以後である。

見わたす限り大根畑がつづいていた時代には、所々に農家が点在するだけで、冬には、関東特有のからっ風が、起伏の多い野づらを吹きまくった。

やがて、そこに私鉄が通るようになった。はじめは、目黒と蒲田との間を結ぶ電車が通り、その頃は、まだ勤め人などは、この辺にはとても住めなかった。もっとも、かなり離れた駅まで自転車に乗って、丸の内の官庁にかよう農家の三男がいたりする例外はあった。

目黒と蒲田との間を結ぶ電車が、渋谷と横浜を結ぶ電車と並行して走るようになり、その二つの線と交叉しながら二子玉川のほうへゆく三本目の線がやがて引かれた。そうして、桐ヶ丘という駅が出来、駅の周囲に、そば屋や薬局や花屋が並び、それが街になり、同じ速度で、それらの店を利用する顧客が住みついて行った。

土地会社は、地所を榊目のような一定の規格に分けて分譲した。その土地に、はじめは飛び飛びに家が建ち、やがて、あいている場所の大部分が塞がった。

鉄拐坂の途中にあつて、古谷徹という表札と「詩と空と水と」社という看板を並べた家は、黒く高い塀に囲まれ、心もち軒が傾いてはいるが、かなりの強震にもびくともしそのない信頼感を与える大きな茅葺きの門の正面に、重い瓦を厚く積んだ母屋を遠望させていた。

この家には、附近でかなり多くの土地を持っている地主が住んでいる。もしこの家を訪れた者が、高い榎や櫟や、柿の木の、踊りでも踊っているような枝に手頃に囲まれた庭で、火を焚いたりしている主人を見ると、意外な感じを受けるかも知れない。

漠然と世間で考えている地主のタイプではなかった。愛想のいい、腰の低い男だったが、少しばかり風が変っていた。

古谷徹が、別に、寺坂梓という筆名を持っていることを、この界限が村だった頃からこの家に入りして、古風な雇傭関係をもっていた小作人たちは、ほとんど知らなかった。彼等は、徹の父がかつて「旦那」であったのと同じように、徹をも「旦那」と呼んでいた。

もっとも「前の旦那」のいた頃の「若旦那」が、大学へ通って、ものを書くひとだということをまた、彼等は知っていた。戦争中に、隣組の組長に徹が推されたのは、結局、ずっと以前、この辺に一般の言葉でいうインテリの少い中で、徹が珍しい存在であった時代の名ごりともいえる。

古谷家の名門的な印象は、隣組長や町会の顧問を、辞退できないだけの格式を一方では持っていたのである。

駅とは逆のほうにゆくと、氏神である氷川神社の森があり、秋に入ったばかりの九月の上旬が例祭日である。

その日には、鎮守の社を出た神輿が、むかしからの巡幸の筋道を通って、坂を上ったりおりたりしながら、またもとの社へ帰るのであるが、その時、古谷家の門の中に、かならず、ワッショイワッショイト、神輿が、青年の充実しきった肉体の群に担がれ、揺りあげられながらはいるのが、もう永いならわしであった。

古谷家は氷川神社の氏子総代にもなっている。祭りの日には、もとは、酒樽を用意し、その鏡をぬいて、柄杓を添え、青年たちに、自由にのませた。

ほんとうの神輿が通ったあとで、子供たちが今度は、樽の神輿をかついで、ねりこんで来た。「塩まいておくれ」

「景気をつけろ」

と口々に、ボーイソプラノを張り上げてせがむのか、門の外まで、賑やかな合唱になって聞える。

徹の父母のいた頃は、菓子を含んだ紙を盆に積んで玄関においてあった。それをひと包みずつ渡すほか、別に金一封を、世話人に贈るのが例であった。

そんな家で、徹は成人したのである。今では、家のむかしからのしきたりを守る必要もなくなっていたが、神輿はやはり、古谷家の門の中で、祭礼の日にはかならず一度休むのであった。

中学時代の友人に感化されて、徹は、C大学の予科にはいる頃から、詩人の村松学に師事した。

詩人になるつもりはなかったが、伝え聞くそのひとの手柄に魅せられて、やがて教を乞うたのである。

村松学はランボオやボードレールを日本に紹介した詩人で、自分もその流れをくむ耽美的もしくは悪魔的な作品を作った。郷里の京都に、のちに詩碑が建てられたが、北白川きたしろがわのほとりに立つその花崗岩をみがき立てた方五尺の石には、

都にむかし

鬼栖きすめり

と彫られている。

徹は、比較的富裕な家に生れ、C大学の英文科を出たあと、その学校の卒業生の編集している、同人誌の性格をもった『城南文学』に、長いあいだ詩や文芸時評を書いていた。

ひとつの雑誌の目次に、二つ同じ名前が出るのはおかしいというので、詩のほうの名前を、寺坂てらさか梓あずさとした。

生れた家は高台にあって、近くを大またに歩く巨人のような感じに通っている二本の高圧の送電柱の、ちょうどあいだから、徳川時代からの名刹めいさつである、二十五菩薩を山門に安置し、極楽における九つの階級を暗示した九体の仏のある寺が見える。

そして、その寺まで、一気に坂が通っていた。梓という木の好きな彼は、寺と坂と梓を一しよに

して、自分のペンネームにした。

師事した詩人の幹旋^{あっせん}で、早くから寺坂梓の詩は、一般の文芸誌にものつた。その詩風は、感傷的だったが、素材に特色があった。世の中の暗黒面に対して、独特の興味を示すのが、寺坂梓だった。それは師事した詩人の影響を多分に受けてもいたようである。

例えば、犯罪者や社会の裏街道を行く者に、心を惹かれるのだ。密輸業者を詩にした「門司の月」や、哀れな売笑婦を美しく歌った「マリア讃歌」は、さまざまの選集に入った、すぐれた、彼の代表作である。

ある時代、この詩人は、友を誘わず、単身で、東京ばかりでなく、大阪や神戸や門司や博多の、貧しい町や、腐敗したにおいのみなぐる部落を歩きまわった。その所産が一連の「罪の暦」であつた。

戦争がはじまって、自由な行動が不可能になり、寺坂梓も、地主古谷徹の地味な生活に戻らざるを得なかった。その頃、新聞社が公募した「士気昂揚」の詩に、期待もかけずに投稿したら、それが当選した。もっとも、その詩と同じ頃に、彼は「脱走兵の Aria」を作って、ひそかに、仲間朗誦して聞かせている。当選した詩の中で、

「われらは生きん ひたすらに」

と歌っているのは、一見昂揚した精神を思わせるが、多少そこには反語もあったようだ。少くとも、終戦後、この詩が、彼を「戦犯」と呼ばせるおそれはなかった。

寺坂梓をたずねて来る詩人たちは、犯罪の話のみやげに持って来た。戦争中には、「闇」と俗に

いわれた経済事犯が当然、話題になった。そのほかにも、公金拐帯だの幼女強姦だの辻強盗だのの話が、戦中戦後、たえなかった。

戦争中は、当時の言葉でいう「銃後」に、不祥な事件のあるのを新聞は伝えたがらなかった。しかし、現実には、出征軍人の妻が学生時代の恩師を殺した事件もあったりした。近衛の将校が出征の前夜、頸動脈を切って自殺をはかった事件もあった。

公に報道されぬ事件は、口から口へと、ちょうど古来の伝説が伝播されるような形式で、庶民のあいだに流布して行つた。寺坂梓は、熱心に、そういう噂を採集し、ひそかにノートに記した。

どんな場合も、寺坂梓の立場は、法をもって断ずる側にはいなかった。なぜ、こういう罪をその人間が犯さなければならなかったのかという風に考え、その心境に深い同情を寄せた。

「君ならば脱獄囚を、自分の家にかくまうことぐらい、やってのけそうだね」と、村松学は、一見実直そうな、干支でひとまわり若い弟子をひやかした。

「はア」とさすがに、折り目ただし癖のある弟子は、目をまたきながら云った。「先生、私は、罪人を妻にしたいと空想することもあるんですよ」

「冗談じゃない」と、あつけにとられて、師匠は笑い出した。「詩にはなっても、実際に悪女と暮すわけにはゆかないさ。君なんかは、最も平凡な結婚をするにきまつてるよ」

「そうでしょうか」

「そうさ。詩と実際とは、別さ」

しかし、依然、寺坂梓は、罪びとに関するデータを熱心に集め、その材料を暖めては、いい詩を

作った。彼は、罪を犯した人々の生き方のあわれさに心をひかれるのだった。その人々のおのく姿に、詩藻がゆり動かされるのであった。

この詩人は、人間はいつどんな運命に遭遇するかわからないものだ、とつねに語っていた。神か悪魔かが、つぶてを抛って、それが人にあたるのだと思っているのだった。

そういう考え方は、彼個人の場合、たしかに真実を射とめていたようである。そのことが、やがて、明らかになるのであった。

しかし、師匠が云ったように、徹は、最初は、平凡な結婚をした。両親は、まだ健在であったが、丘ひとつ向うの、氏神もちがう別の郷の地主である由原ゆはらという家のひとり娘のみや子が、二十分ほどかかる距離を、わざと徒歩で歩いて輿入れをして来た。

簡単な見合いをしただけが、徹には、別にどうという感想もなかった。もう三十三歳だったが、十一も年のちがうこの妻を迎えるのに、積極的な情熱など持てなかった。戦争中の故もあって、村松学と二、三の友人とを立ち会い人にしただけで、自宅でひっそりと祝言をすませた。

みや子の話を持って来たのは、古谷家の差配をしている竹村伊三郎だった。徹の父親には、大変信用されており、ちょっと見れば、地主の仕事を代行するのにふさわしい風体ふうていの男である。

竹村は由原家の近くに住んでいて、みや子を少女の時分から知っているといるというのだった。

「とてもいい娘さんです」と切り出した。異様なほど、熱心に竹村は、その縁談を勧めた。

「ぼくは詩を書いたりするような変り者だから、そのつもりで来てくれるひとじゃなければ、だめ

だよ」と、地主のひとり息子に答えた。

「おとなしい娘さんですから、その点は、何の心配ありません。右を向いていなさいといえば、一日中でも右を向いています」

「今時めずらしい人だね」昭和十八年という時代でも、そんな娘はめずらしかった。

「先方では、古谷さんなら、家としても、光栄だと、云ってられますよ」

「光栄？　へんな言葉だね」と徹は、苦笑した。しかし、先方というその「光栄」という風な表現が、徹の両親には、気楽な縁談の印象を与えたらしく、むしろ息子は、親に促されて、みや子をもらうことになったのである。

正式の仲人なこうどは別に立ったが、実質上の橋渡しをした竹村は、以後この家にはいったみや子にとつて、唯ひとりの相談相手になって行ったようだ。

竹村のみや子に対する奉仕は、差配をしている地主の若い妻への態度ではないようだった。子供の時分から可愛がって来た娘の身の上を案じる、肉親の叔父とでもいうようないたわりが、はた目にもありありと見えた。

家へ来ると、徹の父に挨拶し、次に徹の母に挨拶してから、竹村はかならず、

「みや子様は？」と訊ねるのだった。

徹の母はよくわらって云った。

「全く竹村さんは、身びいきが強いから」

そんな話の時に、徹の父がボツンと云ったことがある。